

2020年11月の星空

宵空に高く明るく輝く火星は、地球最接近から1か月が過ぎたが、引き続きよく目立っている。月末には視直径が15秒角まで小さくなり、天体望遠鏡での観察や撮影はシーズンオフを迎えるので、チャンスを逃さないようにしよう。また、火星を目印にして、うお座の星々もたどってみたい。

西の空で並んで輝く木星と土星は、見かけの間隔がどんどん狭くなっていき、月末には2度あまりにまで近づく。12月下旬の最接近まで変化を追いかけてみよう。このほか、1日に衝を迎える天王星も宵空で見ごろだ。明け方には水星や金星も見え、惑星めぐりが楽しめる。

カシオペア座からペルセウス座あたりの淡い天の川が高くなり、ぎょしゃ座のカペラやおうし座のプレアデス星団が見え始めると、冬の訪れが近いことを実感する。しっかりと防寒をして晩秋の星空を見上げよう。

2020年11月12日 おうし座北流星群が極大

10月中旬から11月中旬ごろ、おうし座南・おうし座北流星群の活動が極大となる。はっきりとした極大のない流星群だが、南群は10月10日ごろ、北群は11月12日ごろが極大とみられている。両群とも母天体はエンケ彗星である。

2つの群を合計しても1時間あたり最大で10個ほどの小規模な流星群だが、火球の割合が高いため、明るいものを目にできるかもしれない。防寒の準備を念入りして空を見上げてみよう。



2020年11月13日 細い月と金星が接近

11月13日の未明から明け方、東南東の空で月齢27の細い月と金星が接近して見える。

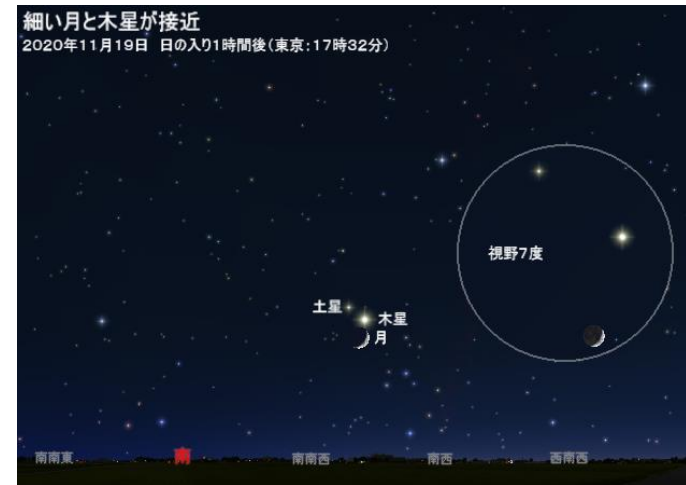
地球照を伴った幻想的な細い月と金星の共演は、数ある月と惑星の接近の中でも随一の美しさだ。肉眼や双眼鏡で眺めたり、写真に収めたりしてみよう。下のほうには金星と接近中のスピカが見える。さらに下には西方最大離角を過ぎたばかりの水星もあり、翌14日の明け方にはいっそう細くなった月と大接近して見える。月と金星の次回の共演は12月13日。



2020年11月17日 しし座流星群が極大

11月17日、しし座流星群の活動が極大となる。予測極大時刻は20時だが、このときには放射点が地平線の下なので、しし座が昇ってくる18日の未明から明け方ごろが一番の見ごろとなる。月明かりの影響はないものの活動は低調とみられるので、空の条件の良いところでも1時間あたり5~10個程度だろう。防寒の準備を万全にして眺めてみよう。21日の未明に別の出現ピークが見られるという可能性の予報もあるので少し気にかけておきたい。

1999年や2001年の大出現が有名なしし座流星群は、テンペル・タットル彗星の通り道を毎年この時期に地球が通過し、そこに残されていた塵が地球の大気に飛び込んで上空100km前後で発光して見える現象だ。



2020年11月19日

細い月と木星が接近

11月19日の夕方から宵、南西の空で月齢4の細い月と木星が接近して見える。

木星と接近中の土星も近くにあり、視野7度の双眼鏡で3天体が同一視野に見える。接近の様子を眺めたり写真に収めたりしてみよう。19時ごろにはかなり低くなってしまっているので、空が暗くなったら早めに観察しておきたい。次の接近は12月17日。

2020年11月30日 半影月食

今年は日本から月食が3回見られるが、いずれも地球の影のうち半影と呼ばれる薄い部分に月が隠される半影月食だ。1月11日、6月6日に続く3回目、11月30日の夕方から宵にかけて起こる。食の始まりは16時32分ごろ、食の最大は18時43分ごろ、終わりは20時53分ごろで、どれも全国共通である。

食の始まりの時点では、西日本では日の入り前かつ月の出の前であり、東日本でも空が明るく低空での現象なので、ほとんど月食とはわからないかもしれない。食の最大から終了を中心に、月の明るさの変化を追ってみよう。半影月食では、眼視で月の明るさの変化をとらえるのは難しいが、露出を一定にして撮影してみると、月の左上がやや暗くなっている様子がわかりやすいだろう。

